

X. 第六單元「きょうどをひらく」

<単元目標>

○武庫川周辺の人々が、かつて洪水に苦しみ、またくらしを豊かにするためにその水をどのように利用してきたかを理解する。

- | | |
|------|---|
| 態 度 | ・身近な地域の発展や開発について関心を持ち、意欲的に調べることを通して、地域社会に対する誇りと愛情をもとうとする。 |
| 思 考 | ・身近な地域の発展に尽くした先人の工夫や苦勞、および、開発の意味について考えることができる。 |
| 技能表現 | ・現地調査をしたり資料を集めたりして調べ、工夫してまとめ、表現することができる。 |
| 理 解 | ・地域の先人たちが、生活と文化の向上のために、様々な工夫や努力をしながら取り組んできたことを理解する。 |

1 新田をひらく <2時間>

〔主な学習活動〕

- ・水田開発について調べる。

〔培いたい力〕

- ・武庫川周辺の発展や開発について関心を持ち、意欲的に調べようとする。
- ・武庫川周辺の発展に尽くした先人の工夫や苦勞、および開発の意味について考える。
- ・地域の先人たちの様々な工夫や努力を理解する。

2 武庫川の人々のくらし <3～8時間>

〔主な学習活動〕

- ・武庫川の利用について調べる。
- ・洪水をどのように防いだかを調べる。
- ・武庫川の洪水をなくした後、どのように開発されたかを調べる。

〔培いたい力〕

- ・武庫川周辺の発展に尽くした先人の工夫や苦勞、および開発の意味について考える。
- ・現地調査をしたり資料を集めたりして調べ、工夫してまとめ、表現する。
- ・地域の先人たちの様々な工夫や努力を理解する。

3 甲子園の開発 <4時間>

〔主な学習活動〕

- ・武庫川の洪水をなくした後、どのように開発されたかを調べる。
- ・戦争後の開発について調べる。

〔培いたい力〕

- ・甲子園球場周辺の発展や開発について関心をもつ。
- ・甲子園球場周辺の発展に尽くした先人の工夫や苦勞、および開発の意味について考える。
- ・資料を集め工夫してまとめ、表現する。
- ・地域の先人たちの様々な工夫や努力を理解する。

1. 新田をひらく

<小単元の目標>

- ・武庫川をはじめたくさん川がある西宮では、古くから新田が開発されていったことを理解する。
- ・新田開発のために堤防工事や用水路づくりなど、先人たちの努力や工夫があったことを理解する。

とびらの写真を見ながら考えよう。			
児童の問題意識	学習活動・学習内容	指導上の留意点	備考
わたしたちのまわりにはどんな川があるのでしょうか。	・知っている川を発表する。 ・地図を見ながら西宮にはたくさんの川があることを知る。 ・武庫川が西宮で一番大きい川であることを知る。	○むかしから身近に川があったことを意識させる。 ㊸ P 1 3 9 とびら写真 ○源流をたどりながら大きな川であることを実感させたい。 ㊸ P 1 4 0 地図 付属地図	身近に知っている川に関心を持ち、地図を使って調べようとしている。 地図を見ながら気づいたことを発表している。
武庫川はどのように利用されているのでしょうか。	現在の武庫川の利用について話し合う。 ・川として (魚釣り) ・公園として (サイクリングロード) (遊び場) (スポーツ教室) ・水の利用 (上水道) (農業用水) ・学習の場として (草花の観察) (水の流れ) (生き物の観察)	○子どもの体験と結びつけられるようにする。 ○遊び・魚釣りについては子どもの経験からすぐに武庫川に結びつけることができるだろう。 ○授業で武庫川に行った経験を想起させる。	現在の生活と結びつけて考え、発言している。

(1) どのようにして新しい水田は、つくられていったんだろう。			
児童の問題意識	学習活動・学習内容	指導上の留意点	備 考
武庫川に沿った地域は水田がひらかれる前はどのような所だったのでしょうか。	武庫川に沿った地域は開発される前はどんな土地だったか話し合う。 ・ 広い砂原 ・ 洪水のたびにつかる。	○除け堤は洪水をくい止めるための堤防であったことにふれ、この堤の東側はどんな状態になったかを想起させる。 ㊤ P 1 4 2	地図をもとにして、武庫川に沿った地域に関心を持ち、考えながら発言している。
どのようにして水田をひらいたのでしょうか。	この荒地を田畑にするために、人々はどんなことをしたのか調べる。 ・ 堤防を築く ・ 土地を耕す ・ 用水路をひく ・ 肥えた土を入れる ・ 何年もかかってしあげる。	○荒地から田畑にするのに何が必要か、その条件を考えさせるとよい。	水田をひらくことに対する自分なりの予想を持ち、多様な方法で確かめることができる。
水田を開くのに、人々はどんな苦労があったのでしょうか。	これらの工事をするために、人々はどんな苦労があったのか調べる。 ・ △△新田をひらいた人 ・ 当時の工事方法、用具 ・ 人々の願い	○一つの新田に焦点をあてて追求していてもよい。 ○新田名の由来・貢献のあった人物・工事の苦労など。	水田への先人の願い、それをつくるための苦心や苦労について、多様な方法で調べ、自分の考えを交えてまとめている。

2. 武庫川と人々の暮らし

<小単元目標>

武庫川流域の人々が、かつて洪水に苦しみそれを治めるために努力や苦勞をしてきたことを知り、暮らしを豊かにするためにその水をどのように利用してきたかを理解する。

(2) 人々はどのように武庫川の水を利用してきたのでしょうか。			
児童の問題意識	学習活動・学習内容	指導上の留意点	備考
西宮の水田は、どこから水をひいたのだろう。	西宮の水田は、どこから水をひいているか調べる。 ・武庫川 ・仁川	○前時の新田の開発を想起させ、P142の地図を見て考えさせる。	前時の学習を想起し、どこから水をひいていたか考えている。 ④P142
当時の人々は、水をどのように考えていたのだろう。	当時の人々が用水を確保するためにどのようなことをしたか話し合う。 ・人々の願い ・工事の方法や道具 ・命よりも水	○西宮にも各地に水争いの話があり、それだけ当時の人々が水に執着していたことにもふれるようにする。	当時の人々にとって水はとても貴重な物であったことを理解している。 ④P143 ④P144 ③資料①②④ 「西宮のふるさと民話」HP
用水はどのようにしてひかれたのでしょうか。	百間樋用水や上ヶ原用水とは、どこかの用水か、なぜ作られたのか調べる。 ・どのような工事をしたか調べる。 川の下を通す苦勞 硬い岩を削る苦勞 ・用水のまつわる話を調べる。 ・用水路を調べる。	○西宮市のどのあたりか、位置をしっかりと押さえ、名前の由来についても知らせる。 ○当時の苦勞を道具や工事の方法などから考えさせる。 ○引水をめぐる話を調べさせ、当時の人々の考えに気づかせる。 ○可能であれば実際に見せることで当時の苦勞を想像させる。	用水に興味を持ち、課題を持って調べている。 ④P143 ④P144 ③資料①②④ 「西宮のふるさと民話」HP

(3) 人々はどのようにしてこう水をふせいできたのでしょうか。			
児童の問題意識	学習活動・学習内容	指導上の留意点	備考
あばれ川と言われていた武庫川が増水や洪水の時は、どんな様子だったのでしょうか。	武庫川の氾濫の歴史を調べる。 ・堤がよく切れている。 ・洪水で砂が流れ込む。 ・大規模で、多くの村が村ごと流された。 ・神社の一部が神戸まで流された。	○最近の増水や洪水の様子 の写真を見せることから そのおそろしさを考えさ せる。 ○P145の「戸崎切れ」 の図や説明、年表などか らも考えさせる。	洪水や増水の おそろしさを 写真や図など から考えてい る。 ④P145
洪水になると田畑は、どうなったのでしょうか。	・砂が流れこんで使いものにならなくなった。 ・境界が分からなくなって争いが起こった。 ・作物がダメになった。	○一度洪水になると田畑が荒れて使いものにならなくなることから農民の気持ちを考えさせる。	洪水で家や村だけでなく田畑まで被害にあった農民の気持ちに気づいている。 ④P145
人々は、どのようにして洪水をふせいできたのでしょうか。	洪水をどのようにしてふせいできたのか調べる。 ①枝川と申川をなくしてまっすぐな流れの川にする。 ②高くて強い堤防を造る ③川はばを広げる。 ④川底を深くする。	○防ぐ方法を予想させてから確かめるとよい。	洪水を防ぐ方法を予想して考えている。 ④P146
どのように工事をしたのでしょうか。	当時の工事の様子について調べる。 第1期(大正9～12年) ・3年もかかった。 ・スコップやもっこなど簡単な道具しかなかった。 ・65万人も働いた。	○江戸時代は、のみだけで岩を削っていたことを思い出させる。 ○この堤防工事は、2期にわたって行われたことも知らせておく。 第1期(大正9～12年) 第2期(大正12～昭和3) ○この堤防完成後は、武庫川の洪水による被害は、ほとんどなくなったことにもふれる。	武庫川の改修工事について、課題を持って調べている。 ④P146 ⑤資料③

(4) わたしたちのまわりの川や水について調べてみましょう。			
児童の問題意識	学習活動・学習内容	指導上の留意点	備 考
西宮にどんな川があるのでしょうか。	西宮にある主な川を調べる。	○校区にある川をたどることから始め、対象を色々な川に広げる。	興味を持って西宮にどんな川があるのか調べている。 ④ P 1 4 7 ～ 1 4 8
水をめぐって人々はどんな苦勞をしたのでしょうか。	水をめぐる争いや民話などを調べる。 水が人々にとってどれだけ大切な物であったか話し合う。 水や川に関する民話を調べる。	○人々にとって水がいかに大切な物であったかを考えさせた後、「鳴尾の義民」の話を聞かせる。 ○「西宮のふるさと民話」のホームページで民話を調べさせ、人々の生活と水との関係を考えさせる。 ○民話は、校区近隣の話から入ることで、身近な物に感じさせる。	水をめぐっての人々の苦勞や思いを理解できている。 ⑤ 資料①②④ ④ P 1 4 8

3. 甲子園の開発 〈小単元の目標〉

大正から昭和にかけて西宮が発展した一例として甲子園の開発を取り上げ、武庫川の改修と阪神電車の敷設により甲子園が大きく発展していったことを理解する。

(1) 甲子園のまわりは、どのように開発されていったのでしょうか			
児童の問題意識	学習活動・学習内容	指導上の留意点	備 考
甲子園ってどんなところだろう。	甲子園について知っていることを発表する。 ・ 球場がある ・ 高校野球が開催される。 ・ 阪神電車の駅がある。 ・ 店がたくさんある。	○ 甲子園について興味をもたせる。 ○ 甲子園のにぎわいは川の埋め立てから始まったことを知らせ調べようと意欲をもたせる。	甲子園について知っていることを意欲的に発表し、埋め立て地であったことに目を向け、進んで調べようとしている。
できたころの甲子園のまわりは、どんなようすだったのでしょうか。	「できたころの甲子園球場とそのまわり」の写真を見て気づいたことを話し合う。 ・ 枝川と申川の跡がはっきりとわかる。 ・ 甲子園駅はまだない。(臨時の駅はあった)	○ 武庫川の改修工事と枝川・申川の埋め立ては、単に水害をなくしただけでない。川の跡地の有効な利用が、今日の甲子園付近の繁栄の出発点になったことをおさえる。	昔と現在との違いを関連づけて発言している。 ㊦ P 149 ㊦ 資料①
埋め立てられる前の枝川や申川のまわりの土地はどんな様子だったのでしょうか。	「1921(大正10)ごろの枝川」の写真と「武庫川を修理するときの土地の様子」の地図を見て話し合う。 枝川や申川のまわりの様子を調べる。 ・ 松林 ・ 雑木林 ・ タヌキ、キツネ ・ 甲子園駅、甲子園球場、ららぽーとがない。 ・ 人がほとんど住んでいない。	○ 洪水のために、開発がなかなかできなかった地域であることをおさえる。 ○ 甲子園駅が地図にあるのは、この地図が位置をわかりやすくするために、当時の地図に後の交通網を重ねたものであるため。 ○ 地域の方から資料が得られる学校は、活用する。 ・ お話 ・ 写真	地図を見ながら、進んで発表している。
どうして川を埋め立てたのでしょうか。	どんな利点があるのか考え、発表する。 ・ 洪水がなくなる。 ・ 新しい土地ができる。 ・ 線路を引くことができる。	○ 具体的に考えさせる。	
人がどうして集まるようになったのでしょうか。	人が集まるための条件を考え、話し合う。 ・ 土地の整備 ・ 災害の心配がない。 ・ 交通網の整備 ・ 各種の施設 ・ いろいろな催し	○ 現在の阪神本線から海岸までの様子を話し合わせ、上記の様子と比べさせる。	自分の生活や地域の様子と関連させて発言している。

児童の問題意識	学習活動・学習内容	指導上の留意点	備 考
球場以外にどんな催しがあったのでしょうか。	地図を見て当時の施設を見つける。 ・100面テニスコート ・阪神パーク	○一大施設群であったことを知らせる。 ○資料を読んで先進的な施設であったことを知らせる。	地図をもとに、気づいたことを発表している。
どんな催しがあったのでしょうか。	どんな催しがあったのか調べる。 ・各種スポーツ ・博覧会	○各種施設の充実と様々な催しの開催により、大変な賑わいであったことを考えさせる。	
たくさんの住宅地ができていったのはなぜでしょう。	なぜ甲子園に住みたいと思ったか発表する。 ・便利だから ・楽しい施設がある。	○路面電車の整備とつながりをおさえる。 ○上水道がつくられたことから住宅が増えていったことを理解させる。	地域の人や各種資料など多様な方法で調べ、自分の考えを交えて発表している。
戦争が始まるとテニスコートや水族館がつぶされてしまった。	テニスコートがどうなったか考える。 ・飛行場になった ・兵器の工場になった	○大きな施設がなくなってしまったことを知らせる。	自分なりの考えを発表している。
何に変わったのだろうか。	なぜそうなったか考える。 ・戦争に勝つため。		
戦争で工場が焼かれたのはなぜだろう。	戦争が始まって甲子園のあたりは、どのようなようになったのかを調べる。 ・空襲による被害	○戦争については深入りしない。	④資料⑥ 戦争で焼かれた町
戦争が終わって甲子園のまわりはどのようなようになったのでしょうか。	年表をもとに気づいたことを話し合う。 ・住宅の増加 ・学校の増加 ・商業施設などの開発 1961年 浜甲子園団地 5階建て 4600戸 1979年 武庫川団地 20階以上もある 7200戸	○ゼロからの出発であったことをおさえる。 ○人口が急激に増えていることを知らせる。 ○住宅不足をなくすため計画的に住宅が建てられていったことに気づかせる。	戦争が終わって、人々の生活がどのように変わったかについて地域全体を視野に入れて具体的に考えようとしている。

※人口

1935年	8 9 9 0 9 人
1940年	1 0 3 7 7 4 人
1945年	9 0 8 0 8 人
1950年	1 2 6 7 8 3 人
1955年	2 1 0 1 7 9 人

鳴 尾 の 義 民

今からおよそ4百年前のことです。

「ああ、水がほしい！」

「水がほしい！」

鳴尾村の人たちは、何万べんもくり返し言ってきました。

このころ、この地方は、三年間も大干ばつにおそわれていました。

来る日も来る日も日照りが続き、鳴尾村の田の稲は、葉がよじれて黄色くなり、今にもかれそうになっています。稲がかれて米がとれなければ、村人は飢えに苦しむことになります。村人たちは気が気ではありません。雨ごいのおいのりや雨ごいのおどりなどを、村あげてくり返しました。

しかし、空には何の変化も起こりませんでした。村人たちは、毎日空ばかりうらめしそうにながめていました。

鳴尾村の困り果てたようすとはちがい、村ざかいの枝川をへだてた瓦林村では、新川から水を引いていましたので、稲が青々と育っていました。豊かな水ではありませんが、鳴尾村の稲とはくらべものになりません。

そこで鳴尾村の代表が、「新川の水を少しでも分けてもらえないだろうか。鳴尾では今にも稲がかれそうで、みな困り果てている。少しでよいから水を分けてください。」と、瓦林村にたのみこみました。

それに対して、瓦林村の代表は、「こちらとて、こんなにも日照りが続く毎日であれば、日照りにたえぬくだけの見通しがない。水はどうしても分けるわけにはいかない。」と、ことわりました。

鳴尾村の人たちは、白くかわいて一日一日とひび割れのひどくなる田で、やっと花咲いた稲がかれていくのを、そのまま見ていることができませんでした。

村人の一人が、「のう、みんな聞いてくれ。瓦林村には悪いが、新川から水を引こうではないか。このままでは、このままでは……。」と、言い出しました。

村人たちは、だれも「ごくん！」とつばをのみこみました。ことばには出しませんでした。村人たちは、みんな同じ思いでした。

みんなはためらっていました。“水を引く”と言いながら、それは、“水を盗む”ことです。お上に知れたら死刑はのがれられないことを、だれもが知っていたからでした。

だれもが“水を引く”ことをためらいましたが、だれも水がほしくてたまりませんでした。

村人たちは昼も夜もなく集まって、考えに考えぬきました。

このまま飢え死にする日を待つか、それとも、どんなことになろうとも秋の実りだけは残すか……。どちらかでした。村人のだれの頭にも、家族の顔が浮かび上がってきました。

年老いた村人の一人が、「よし。水を引こう！瓦林村には悪いが、村の命がかかっている。やるしかない。やろう！水を引こう！」と、さけびました。そのことばで村人の覚悟は決まりました。

「よし。やろう。」

「やるしかない。」

全員が声をあげました。

さっそくその夜から、たくさんの村人がくわやもっこを持って集まり、枝川の川底をほり進め、新川へとつないでいきました。空の四斗だるの底をぬいてつなぎあわせ、といを新川まで通したのです。

瓦林村に知られないようにやみ夜にまぎれ、毎夜毎夜必死の作業でした。

水は、新川から枝川の川底をくぐり、鳴尾村に流れこんできました。サラサラとたるのといを走る水音を耳にした村人たちは、安どの胸をなでおろしました。水は、かわききり地割れした田に走りこみ、かれ死寸前の稲を生き返らせたのでした。

こんなことが知れぬはずはありません。

瓦林村の人たちがやってきて、鳴尾村の人たちと大げんかになりました。両方とも青竹をとがらせた槍を仕立て、はげしい突き合いをしました。たくさんの人が死に、傷つきました。

このさわぎは、方々へ知れわたっていきました。

さっそく大阪城から両村に呼び出しがかかりました。

奉行が鳴尾村の人たちにたずねました。

「おまえたちは、水を引くことが重罪にあたいすることを知ってやったのか。」

「はい、存じておりました。」

村人たちは、顔色ひとつ変えずに答えました。村人たちにとっては、もう覚悟の上でのことでした。

この話を聞いた関白豊臣秀吉は、鳴尾村の人たちに同情して、「おまえたち、水がほしいか、命がほしいか。どちらかひとつを特に選ばせてやろう。」と言いました。

鳴尾村の人たちは、「百姓にとって、水がなければ、命がないも同然です。私たちの命と引きかえに、水をいただきとう存じます。水さえあれば私たちの村は生きのびることができます。どうか命より水をください。」と、迷わず言いきりました。

村の将来を思う村人たちの決意を聞いた秀吉は、「それでは、せっかく苦勞して水を引き入れたのであるから、鳴尾村には永代にわたって水をやろう。そのかわり、この水引きに参加した者は、全員打ち首じゃ、よいな。」と、申しわたしました。

“打ち首”と聞いても村人たちはだれひとりとして顔色を変えることもなく、びくともしませんでした。

じっと考えていた奉行が、「いったい空だるをいくつつないだのか。空だるの数だけ打ち首にする。」と言いました。

「二十あまりでございます。」村人たちは、すかさず答えました。実際には二十どころの数ではありません。百メートル以上のといを作ったのですから、少なくとも百以上の数になるのですが、奉行も「なるべく犠牲者を少なくしてやりたい」と思って言い出したことですから、やかましく聞きませんでした。

「それでは二十五個じゃな。よって二十五名の者に打ち首の刑を申しわたす。」処刑されることになった二十五名の村人たちは、「思い残すことはないか。」と聞かれて「鳴尾村の将来のために死ぬのですから、喜んで死ねます。」「できれば、“水をもらえる”という約束の証文をください。」と、だれもが言いました。

約束の証文は、二十五名が処刑される朝、奉行から鳴尾村の代表に手わたされました。

これまでたびたび干ばつに苦しめられてきた鳴尾村ですが、それ以後、どんな日照りが来ても、稲は青々、すくすく育ち、豊かな実りの秋をむかえることができたということです。

「命はいらない、水をくれ。」とさげんだ村人たちをたたえた義民碑が北郷公園にあります。

『西宮ふるさと民話』（編集：西宮市立資料館、発行：西宮市教育委員会）

〈資料②〉 百間樋の水争い

水の配分 上井の場合、井親4ヶ村の水利権は対等であるが、下大市が主として依存している下井の場合、井親の中でも段上が水利権が一番強い。まず段上は、段上と他の4ヶ村の分水点に直径1尺5寸ほどの松の木を用水路にすえつける。これをセキアゲといって、田植えの前日頃に作る。次に上大市が村内の2ヶ所で水をセク（せきとめる）。この場合、松の枝で用水路をセクのであるが、これをヤシバという。上大市でせきとめた水の余水が下大市に流れてくるが、下大市は段上・上大市より下流になるので、村内では7ヶ所半をせきとめて、下大市村内にまんべんなく水がゆきわたるようにする。7ヶ所半というのは、7ヶ所を完全にせきとめ、あと1ヶ所は水路の半分をせきとめるのである。下大市もヤシバで水をせきとめる。用水路にヤシバを入れてせきとめるのは、村から出ている年番の仕事であり、分水点で両方の村の年番が立ち会ってヤシバをいれる。

下大市の村内での水の配分については、農会長が全責任をもってする。田植えは段上・上大市・下大市と上手から順次おこなわれる。下大市の田植えは6月15日頃で、田植えの前日に田に水を入れる。この時、農会長は村の水番5人を指示して、用水路に杭を打ち込み、ここにヤシバを入れる。昔はこのあと、農会長は酒、サカナで水番をもてなした。水番の仕事は夏中ヤシバの管理をすることであり、下流の村からヤシバをしばしばハネに来るので、日頃から注意しておかねばならない。また大水の時にはヤシバをあげて水を流すことも大切な仕事である。それゆえ水番には戸主または若い者が出た。なお水番は家の順で5軒ずつ毎年出る。

下大市の村内にはセキの樋門が7ヶ所半あるといわれるが、ヤシバでせきとめる。このヤシバは他村の者には絶対にさわらせない。

用水は下井の用水路からコミゾ（小溝）に入り、コミゾから田に入る。農会長はどのコミゾを利用する田がどれほどあるかを検討して水を配分する。この時、水利委員や農会の役員が立ち会う。水は上流の田から下流の田へと順次流れていく。このように直接用水路やコミゾから水を入れずに、田を通して入れる水のことをタゴシ（田越し）の水という。こうして、田に水を入れた後、田植えがおこなわれる。

ヤシバはオトシミズまで用水路に入れておく。オトシミズの頃になって、ヤシバ近くの田をもっている者が必要に応じて、ヤシバをあげる。

このようにして下大市が使った水の余水が、門戸・高木、に流れていき、さらにその余水は下流の井子の村々で利用される。したがって以前は、井子の村々から井親の村々にサカテとして米を納めていたことは、前にも触れたとおりである。このサカテは、現在は廃止されている。

〈資料③〉

第二期工事区域（大正12～昭和3年）

第一期工事区域（大正9～12年）

凡例

旧堤防

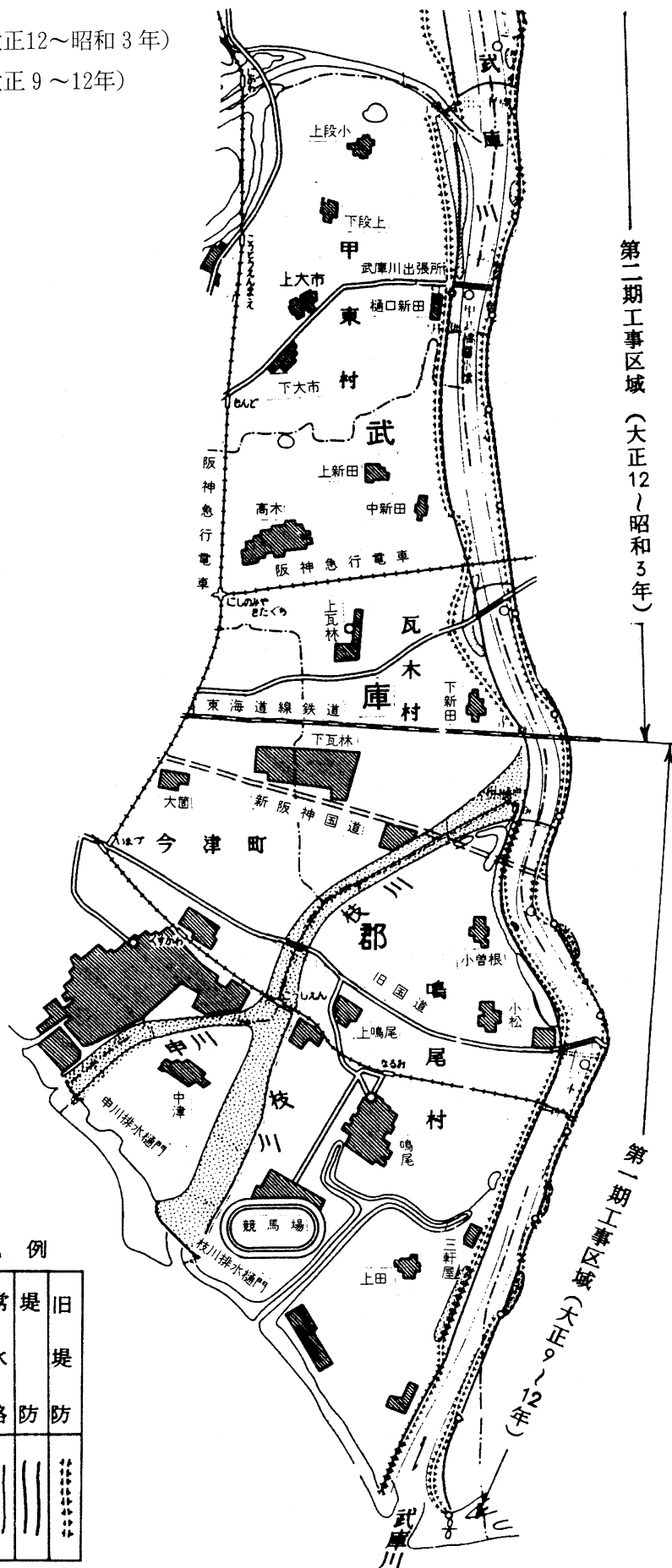
堤防

常水路

不用河川・堤

凡 例

不用河川・堤	常水路	堤防	旧堤防



〈資料④〉 鳴尾の今昔

鳴尾は昭和26年、西宮市に合併されるまでは兵庫県武庫郡鳴尾村と呼び、武庫川尻の三角洲に出来た村である。東は武庫川によって尼崎と境し、西は武庫川の支流である枝川と申川によって今津と境していた。徳川時代から農業を主とした肥沃の地であった。しかし農村につきものの水争いの悲しい伝説が鳴尾にもある。現在、甲子園3番町の北郷公園の一隅に立てられた義民碑がそれである。豊臣秀吉治世の天正19年（1591年）長い日照りに苦しんだ農民は隣村の瓦木に分水を乞うたが拒絶され、止むを得ず夜の間に枝川（武庫川の支流、旧阪神甲子園線の所に流れていた）の川底を掘り割り、樋を埋めて瓦木村新川の水を引き枯死寸前の稲を生きかえらせ大豊作とした。その頃かくれて水を引くことは、厳しく禁じられていた。上流の瓦木村の訴えで、事情を知った豊臣秀吉は鳴尾に同情したが、法はまげられず25人が死罪に処せられた。しかし、鳴尾へ水を引くことが許され鳴尾はこれより後、かんばつに困ることが無くなったので、村民は犠牲となった人々を義民と仰ぎ、今もその徳をたたえ毎年法要を営んでいる。北郷公園はその取水の地である。



北郷公園に有る義民碑



義民碑碑文

明治30年頃までは米の他、綿の栽培も盛んで鳴尾綿の名があった。その後輸入綿におされ綿の栽培は減少し、明治40年頃から苳の栽培が盛んになった。大正になり次第に苳の耕作面積が増加し、鳴尾といえは苳、苳といえは鳴尾という位有名になった。当時鳴尾村は本郷、笠屋、小松、小曾根、上鳴尾、上田、中津などの村落が離ればなれに分散し、その中間は殆ど苳畑であった。毎年5月から6月にかけて苳の季節には苳狩りのお客で大層賑わった。鳴尾の苳にはハイカラ、トックリ、アメリカ、大正などの種類があり美味であった。又苳ジャムの製造も盛んであった。日華事変の進展に伴い鳴尾も住宅や工場が増加し苳畑はどんどん減

少し、戦後は更に阪神間のベッドタウンとなり、苳畑も殆どその姿を消し昔の鳴尾は想像出来なくなった。

鳴尾にとって忘れられないものに競馬場がある。最初明治40年に開設され、関西競馬場と呼ばれていたが、後に阪神競馬場と改称された。阪神鳴尾駅から南へ約700mの所にあり、日本の三大競馬場の一つに数えられていた。春秋の競馬シーズンには全国から沢山の観衆が集った。この競馬場のトラック内で明治44年から大正6年迄、前後7、8回にわたってアメリカの鳥人やわが民間飛行士に

よる飛行大会が催された。この阪神競馬場の中に関西唯一の総合運動場が出来たのが大正5年である。この鳴尾運動場には2面の野球場、陸上競技場、テニスコート、プールが出来、その野球場では大正6年から夏の中等学校野球大会（現在の夏の高校野球）が行われた。以後大正13年（第9回大会）まで鳴尾で開かれたが、大観衆を収容することが不可能となったため、大正13年（きのえねの年）に甲子園球場が出来て鳴尾運動場は廃止された。阪神競馬場はその後昭和18年に海軍が強制買上げをし、終戦後アメリカ軍が接収した。昭和33年接収解除となり、日本住宅公団、武庫川学院、西宮市へ払下げが決定し、現在の浜甲子園団地が出来た。

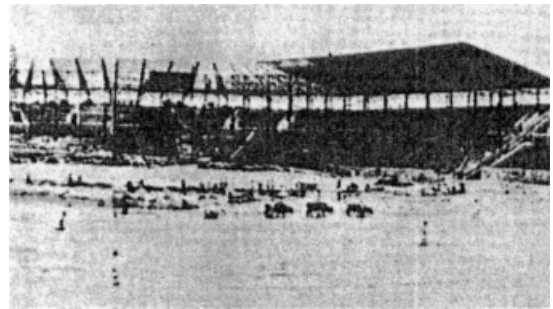
(甲斐)

「西宮の自然」P237～238

西宮自然保護協会編

さて、甲子園の開発は兵庫県が武庫川の治水事業のため、枝川・申川の廃川による廃川敷を阪神電車が県から払下げを受けたことから始まる。

武庫川は武庫平野の農業用水として歴史的に大きい役割を果たしてきたが、明治時代からしばしば氾濫して被害を与え、梅雨や台風時における危険が大きかった。しかし、根本的な河川改修は多額の費用を要するので容易に着手するに至らなかった。県の改修計画は、東海道線鉄道橋以南河口に至る延長約5キロの間を屈曲を矯め、川中を拡げ、かつ河床を掘削し堤防を新設又は増築し幹流のみによって計画流量を流下させる。鉄道橋のすぐ下流から分派する枝川下流で更に分流する申川の両派川はかえって水害の原因となるのでこれを締切って廃川として災害の禍根を絶ち、かつ、これによって生じる廃川敷地は工事費を償却して尚100万円の利得金を得るように処分し、阪神国道改修費に充当させるという案であった。枝川、申川の廃川敷地は約24万4千坪という広大な面積で、内約2万坪は道路及び水路敷に充て、残り約22万4千坪を売却面積と決した。この廃川敷は枝川の武庫川からの分岐点、ちょうど、元の甲子園ホテルの少し上手の処から、現在バスの走っている甲子園線の道路の左右と枝川の支流、申川―甲陽学院の裏から今津の吉原製油の方へ斜めに行く道が申川の旧右岸堤防一の廃川敷とちょうど逆Y型をした土地で、このような帯状の砂地を一括して巨費を投じて買う物もなく、折から経済界が著しい変動期であり県当局も苦心されたが、結局阪神電車が当初計画案の通り工事費310万円に100万円を加えた410



竣工間近の球場―大正13.6―

万円の売却価格で県から払下げを受けたのが大正12年であった。

阪神電車がこの廃川敷を入手した当初、この逆Y型をした地形だけにこの利用法は大きな問題であり、スポーツセンター・リクレーションセンター・住宅地経営等を考えていた。鳴尾運動場での熱狂的な野球の人気に加え、朝日新聞社の強い要望もあって、先ず、現在の大球場が作られた。場所は阪神電車本線鉄橋（当時枝川にかけられていた橋）の下手枝川と申川の分岐点から下手にかけてのデルタの剣先に当たるところで敷地1万2千坪、内野観覧席は鉄筋コンクリート3層式で50段のスタンドを設け大鉄傘で覆い、外野観客席は土塁を築き30段とし、収容人員5万の大野球場が建設され、大正13年（1924年）8月1日開場式が行われ日本野球界に輝かしい一時期を画した。

今でこそ神宮・後楽園・西宮・大坂等プロ野球の隆盛に伴って各地に野球場が出来、ナイター設備



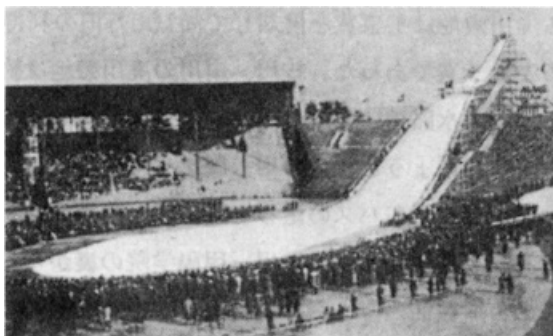
結成当時の大阪タイガース

まで出来ているが、甲子園球場が完成した時はその規模の大きさは当時の人々を驚かせるに充分であった。本格的な球場がなかった時代この施設を短期間に作り上げるということは並大抵でなく、土の堅さ、土の配分、排水、バッテリー間の方向、スタンドの放物線の形成等すべて苦心の賜もので今日なお全国球場の模範とされている。その後、ファンの年々激増するに伴い、昭和4年に東西アルプススタンドを、昭和11年には野外も全部50段に改装されて、いわゆる「マンモススタンド」が完成した。

さて、「甲子園」という地名は、この廃川敷の経営地を呼ぶ名がなく、たまたま最初の施設である野球場が完成した大正13年が干支の始まりである甲子ノ歳であることを慶び甲子園と命名された。ここに甲子園という名が誕生したのである。

この甲子園球場で朝日新聞主催の第10回全国中等学校優勝野球大会が、翌14年春には毎日新聞主催第2回全国選抜中等野球大会も開催されて、戦時の中断があったとはいえ、今日まで隆々と栄え青少年教育に大いに寄与している。

この野球場の建設を初めとして甲子園スポーツセンター計画が着々と進められ、大正15年にまず野球場の西側にクレートと木造スタンドのセンターコート、それにクラブハウスを建設し、「甲子園ローン・テニスクラブ」が誕生した。その後、甲子園庭球場は次第に発展し外野裏にも30面程のコートが設けられた。更に次の大施設は今の競輪場を中心とした100面のアンツーカー・コートで断然日本一の庭球の苑となったが、今は只もう再現しないあの華やかな時代の思い出を懐かしむのみである。



全日本スキージャンプ甲子園大会

テニスに続いたのは浜甲子園プールで昭和3年完成した。その3年前の大正14年から附近の甲子園浜に海水浴場が開かれ、「甲子園水泳研究所」も併置されたので海で鍛えたカッパ達の競泳用として作られた短水路ながらダイビング台も設けられた。昭和7年には球場の東アルプスの下に25mの室内温水プールが作られ年中水泳指導がなされ、東京のY. M. C. A. のものと東西唯二つで、関西での水泳選手養成に大きな功績を残した。更に、昭和12年には野球場の西側に1万人収容の夜間照明付きで飛込みと、水泳、競泳、この三つが完全にできるプールが完成し、その年に国際競技も行われた。

また、浜甲子園プール近く旧枝川の松並木を背景に長城のような建物が昭和4年に竣工した。これが南運動場で、敷地1万坪陸上競技場と、ラグビー・サッカー・フットボール等の球技が完全に行える最高水準の総合競技場であった。しかも、バックストレッチ側は松林で風致も良かった。いろいろの大会が開かれ、いろいろな記録が作られ、また数々の国際競技もここで行われ、戦争の巻き添えを食うまで、この運動場が果たした使命は実に大きかった。

行楽地として甲子園に光彩を添えた旧阪神パークは、昭和3年旧枝川尻の砂っ原で催された御大典記念博覧会場の潮湯を利用し余興場を併設した甲子園娯楽場—いわば今日のヘルスセンターの走り—を取り込んで昭和7年大拡張した。即ち、子どもの楽園として汐の香りも高い浜甲子園一帯の浜3万坪を動物園と遊園地にして「阪神パーク」と呼んだ。当時としては非常にユニークな施設で、日本で初めて猿島やアシカ池、鳥類放し飼等、今でこそあたり前の「動物の姿」でなく「動物の動き」を見せる動物園として日本で最初のものであり、殊に南紀太地の港から鯨を運んで専用の鯨プールに放し飼いするのを始め、数々の珍しい動物の群と有芸動物の豊富さに非常な人気を博した。それとともに素晴らしかったのは水族館で、浜甲子園プールのすぐ傍に巖石作りの室内に入ればさながら海底にいる如く頭上にも左右にも魚が泳いでいるといった従来の水槽式と異なり最近の水族館のような斬新な設備で魚種も豊富で色とりどりの魚のファンタジックな思い出がまだ残っている。

また、甲子園球場ではシーズン・オフにアツという催しが次々と催され本当の雪を運んで来て球場に大シャンツェを作りスキージャンプ大会を、戦時中には実戦ながらの大戦車展、大馬術大会、古

流鷹狩の披露、或いは6代目菊五郎の野外大歌舞伎も催されたのも思い出の一つである。

次に、甲子園の土地住宅地経営はどのような経過をたどったのであろうか。阪神電車がその沿線に阪神両市の市民郊外住宅を計画したのは古く、明治41年には「市外居住のすすめ」という案内書を発行し、明治43年には枝川沿いの鳴尾村西畑（現甲子園駅附近）に70戸の文化住宅を建築して沿線住宅化の一步をふみ出していた。こうした経験に基づき、まず、川床の整地に当り、旧枝川尻約8万8千坪を盛土するため、昭和2年申請して海中の土砂の払下げを受け旧阪神パークや南運動場はこの盛土の上に開設された。全廃川敷の整地がほぼ終わった処で北から順次甲子園何番町と新町名を付けた。更に阪神国道以北も整地され住宅地となり、ここに甲子園住宅地域は阪神国道以北を上甲子園、阪神国道から阪神本線までを中甲子園、阪神本線以南の旧枝川筋を浜甲子園住宅経営地と名付けた。又、阪神電車が買収した旧枝川、申川に挟まれた海岸地帯の約12万坪に昭和3年には南甲子園と呼ばれる住宅地区が形成され、ここに甲子園一帯の住宅地形成が一応完結をみたのである。

昭和5年上甲子園の一角に子会社の甲子園ホテルが建設された。延約2千坪の武庫川畔の松林の中にそそり立つライト式4階建の端麗な建築美は経営地に大きな彩りを添えた。

なお、この全甲子園の土地住宅経営を促進し、かつてはこの区域内にある各施設用に充てるため、昭和6年に上水道を完成した。水源は武庫川と旧枝川の分岐点で約70mの地底からポンプによって揚水し、全甲子園経営地に供給を開始した。

甲子園はこうのようにスポーツ・センターとして国の内外に名声を博していたが、戦局の深刻化につれて大變貌を余儀なくされた。ガダルカナル島撤退の不吉な発表があつて間もない昭和18年4月、川西航空機工場の飛行場拡張のため阪神パーク、水族館、南運動場など軍の命令によって取り潰され、阪神パークの動物はすべて各地の動物園やサーカス団に身売りされたのを皮切りに球場の大鉄傘も金属回収のため8月には無残にも撤去された。スタンドの内部には数多くの軍需工場が薙めき合い、グラウンドは芋畑に掘りかえされ、世界に誇った100面のコートも軍施設に接収され、甲子園ホテルも海軍病院と変わった。このように平和の象徴であつた一大スポーツ・センターも僅か数年にして軍事拠点となつたため、米軍爆撃の一目標ともなり各種スポーツ施設は見る影もない姿になった。

さて、敗戦となり、帝国海軍に代り米軍が甲子園を占領した。球場は兵営とされ、一時は2千人の兵隊が溢れ、旧南運動場、旧阪神パークの一帯にはジープ、トラックが無数に薙めいていた。

一刻も早くスポーツを通じて虚脱したような世相を明るくしたいと神戸ベースにお百度を踏んだ結果、野球場は昭和22年内外野の1、2階等を残して大半解除され、春の選抜野球大会が復活された。昭和23年3月には大プールが解除され、5月から再開、プール西側のテニスコートも昔と比べくもないが10数面設ける等スポーツ・センターとして再発足した。若干の施設は阪神電車の手に戻ったとはいえ、戦後は輸送力復興が当然の使命であつたため甲子園の旧施設の復旧は止むを得ず第二義的になつたが野球場は高校野球という文教的意義の重大さからこれだけは総力を挙げて復旧し、昭和26年には旧鉄傘に代る大銀傘をあげ、昭和31年にはナイターの施設も完成した。又、阪神パークも昭和25年4月に旧軍飛行場の一部払下げを受け場所こそ変われ荒涼たる甲子園原頭の一角に再開された。開園早々にして私営動植物園としては日本で初めての動物館相当施設の指定を文部省から受け、今日ではレオポンを有する動物園として世界的名声を得ている。

このように、施設の一部は復興したものありし日の広大な100面のアンツーカー・テニスコート、南運動場・旧阪神パーク・水族館・海水浴場等眼前に彷彿として感慨誠に無量のものがある。甲子園は阪神電車が理想的な開発を目指して精魂をそそいだ土地である。だが戦争と戦後の混乱のためその理想像は挫折したとはいえ、まだまだやらねばならぬ仕事の残っている土地であり、将来への夢を

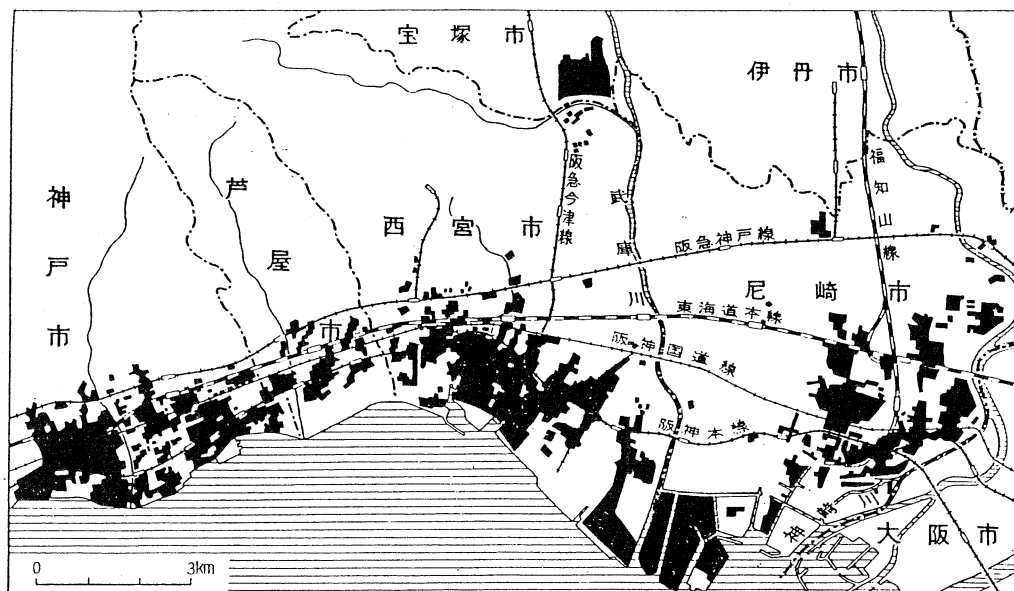
もっているのである。

「西宮の自然」

P 239～246

西宮自然保護協会編

〈資料⑥〉戦争で焼かれた町（昭和20年）



せんそうのひがい（西宮市）

しんだ人	637 ^人	やけた家	15154 ^{けん}
けがをした人	2353 ^人	こわれた家	699 ^{けん}
ひがいにあった人	66522 ^人	(昭和20年11月の人口 90808人)	

〈資料⑦〉文教住宅都市宣言

西宮市は、阪神間の中央に位置し、自然の風光と温暖な気候に恵まれ、市制施行いらい多くの人々がここに、平穏で快適な生活な環境を求めて移り住み、ついに今日の隆盛をみるにいたった。その風土は、先覚者たちの文教諸施設の整備拡充の努力とあいまって、今や西宮市が文教住宅都市として力強く進むことを可能ならしめている。

またその故にこそ、年々万余を数える人口増加がみられるのである。

一方、大坂・神戸をはじめとする阪神圏諸都市は、急速な発展を示しつつあるが、同時に産業配置、人口の都市集中、公害など幾多の内部的諸矛盾の解決をせまられている。こうした事態にあつて、西宮市は、本市が誇り得る文教住宅都市的性格をさらに一層推進することにより、今後の阪神圏発展の一翼を担う考えである。すなわち、西宮市の将来は西宮市民のみならず近畿一門の複利の増進に役立つべきものであり、それはまさに、西宮市が、人々に憩いと安住の地を提供することによって、積極

的に果されるものと信じる。ここに西宮市は30万市民の等しく望むところにしたがい、風光の維持、環境の保全、浄化、文教の振興を図り、当市にふさわしい都市開発を行い、もって市民の福祉を増進するため、西宮市を「文教住宅都市」と定め今後の市政運営がこの理念に基づいて強く推進されるものであることを宣言する。

昭和38年11月3日

兵庫県西宮市